

盛岡奇譚

奇譚シリーズ Part-1
by sorano



夕暮れの宿

座敷童に会った事が有る。と言ったら笑うだろうか。

そういう私も、今と成ってはあれが本当の事であったか心もと無いが・・・。

もう二十数年も前になるだろうか、ある晩秋の日旅行で盛岡の古びた旅館に泊まった事が有る。盛岡の地はもと城下町だけあって、道が狭く入り組んで袋小路も多い。この地に着いて初日、あれこれ散策していて気がいたら既に陽は西の山の方へ大きく傾くところだった。

「さて、困ったな、まだ時間があると思い旅館も取ってない。」

今から駅前に戻るにはちょっと遠く途中で完全に暗くなりそうで心細い。どうしようかとあれこれ考えながら路地を廻った所で、ひょいと顔をあげるとその旅館はあった。

余り人も泊まっていなそうだが、なに男の気ままな一人旅。行き当たりばったりも土産話の一つかと思い、ガラガラと旅館のすりガラスの戸をあけた。

「ごめん下さい。あの～旅館やっていますか？」

泊めて欲しいんですが・・・。」

大分経ってから、薄暗がりの奥から旅館の主らしい人物が現れた。

「お客様は何泊じゃるか？」

「ええ、1泊で。」

「さようですか、どうぞおあがんなさい。」

出迎えたこの館の主は、かなり歳の行った老婆で、先導されて2階の部屋へ案内された。部屋の天井は高く太い梁が出ていて、上の方に明かり取りの窓がある。そこから西日が入る様で白塗りの壁に反射して黄色く照らされている。部屋は狭いが思いのほか掃除も行き届いていて良かろうと思った。だが思ってははみたものの、なんだか焦って宿を決めてよかったのかとも思った。

さっき登ってきた木の階段は玄関から少し行った所にある。しかしこれが恐ろしく急で、一段一段の高低差もあるが先の婆さんは私より随分早く上がるものだと驚かされた。薄暗がりの中で白い足袋が見え隠れして、なんだか脚だけ覗いていると若い娘のように感じられた。

まあ案内してお茶を出すくらいは、婆さんの役目としていて他に息子夫婦などが居るのだろうと思ったが・・・

その他の人の気配はすれども未だ姿がないのだ。

私は、ここに入る前外で夕飯をもう食べてしまったので指し示された内風呂にまず入る事にした。こじんまりした檜の風呂だが、旅の疲れを癒すには十分だ。

部屋に戻ると既に布団が敷いてあり、横に除けた丸テーブルには、群青色の水差しに薩摩切子のコップ。そしてその傍に紙に何事か書かれて置いてある。部屋の電灯は薄暗く少々顔を近づけて眺めた。

『お客様へ、明日は7時から朝食で
階下の食堂にご用意致しております
尚、煙草の火の始末をしてお休み下さい』

テレビも無い部屋では他にする事もない。私は浴衣姿のまま布団の上に暫く寝そべって、明日はどこに行こうかと旅のガイドブックに赤ペンで丸を付け始めた。そして、市街地図を眺めていてなんだか不思議な事に気がついた。

私が歩いて来た路地の先、つまり今私の居る旅館の有るはずの場所は袋小路でその先に道がない。

然も確か西日は旅館の玄関の方から指していたはず。だがこの西側は今は天守閣も無いけれど堀と石垣で影になり西日は決して射さないはずである。

はてさて、変だぞと思ったが・・・どうせ初めての地。私の思い違いであろうと気にせず寝る事にした。調度一階の柱時計が時を打つところであった。

暗闇の中で

部屋の明かりを消して暫くすると、街はひっそりと旅館の前の道を通るものとてもないようだ。どこかで水滴の落ちる音がする、水道の蛇口を確りめづにおいたのだろうか。

その数秒毎に規則正しくピチャ・ピチャ・ピチャと音がする間に、階下の廊下をパタパタパタ足早に歩く音も聞こえた。やはり老婆の他にも家族の者が誰か居るようだ。

あ～それにしても今日は忙しかった。朝、東京神田の編集部書類を届けてその足でこちらへやって来た。新年号に合わせた紀行文で急に東北へ出向けとはあの編集長もこちらの予定や都合など何も考えてない。

とは云っても今の私は他に纏まった仕事があるわけではないので、云われるがまま大急ぎで自宅に戻って着替えを鞆に詰め込んで指定の汽車に乗り込んだわけだけけれど。

”おやもう下も寝たのであろうか、音がしないな。”

テーブルの上に置いた懐中時計を見るとすると、天窓からは月明かりが射しているのか薄暗い午前0時を回っている事が判った。なんだか喉が渴いた。水差しの水は既に風呂上りに飲み干してなくなっていた。

電灯のスイッチがどこにあるか判らないので、仕方なくそのまま部屋から出てあの階段を降りていった。それでもなんとか歩けるのは、この古い作りの旅館の玄関の上が吹き抜けになってかろうじて外明かりを建物の中に導いているせいだ。

建物の奥へいくと中央に小ぶりの中庭がありその周りを渡り廊下が続いている。確かこの方向に水滴の音がしたからと思い、中庭沿いの渡り廊下を食堂横にあらう水のみ場へ歩いていった。静かに歩いているつもりでも身体の重みで木の板がギシギシ軋む。

薄暗い廊下の向こうに庭からの光を横切りぼんやりした影が横に動いていく。目を凝らすとパタパタという音を残して廊下の向こうの壁へ消えていった。気になってそちらの方へ歩いていった。確かこの角を回り回りで消えたようだがと訝っていたいたら。不意に背後から

「どうなされましたか？」

と声を掛けられた、ぎょっとして振り返ると件の老婆である。

私は言いよどみながら、水差しの水がなくなったので水を1杯貰おうと思ってと漸く答えた。なんだか夕方見たよりちょっと若く見える、姉妹なのだろうか。

そんな事ならと食堂に通されて厨房らしき奥から、ご丁寧にコップに1杯の水をお盆に載せ差し出された。

ゴクゴクゴク・・・

飲んでいる時またパタパタと頭上で誰かの足音がしたようだが・・・気のせい気のせい。

・・・ゴクゴクゴク。

最後まで飲み干した。

夜中に起こして申し訳ない旨を伝えてそそくさと自分の部屋へ戻る。

気配が判らずいきなり後ろから声を掛けられたので驚いた。まさに総毛立つに近い状態だったに違いなく、我ながら老婆一人相手に男子が情けない。やれやれと思った。

さあ今度こそ寝ようと深くため息をついて布団に入ったのである。

暫くすると今度はどこからか顔に微かな風を受けて寝られない。

しかも部屋になんだか果物のような匂いがするのに気がついた。

絶えきれずガバと起きて風の吹く方向へ眼をやると、押入と思われる襖が心持ち空いている。そういえばここに戻ったときにも占めたはずの部屋の入り口の襖も若干開いていた。

なんだろうと四つんばいになり近づくと。案の定ここから風が来ている。しかも先ほどの甘い果物のような匂いがますます強く感じられた。

私は、恐る恐るそれを横に引いて覗き込んでみた。中は部屋よりもっと暗い暗闇で良く見えない。それでも頭まですっぽりと入って目が慣れてくると漆黒のなかに、二つの黒く光る玉が見えて来た。・・・なんだろうとよくよく眼を凝らし合点がいった。それは一心にまたはぼんやりと何かを見つめる誰かの黒い瞳だった。それも年端も行かない児童の瞳だ。

童は膝を抱えてうずくまり瞼を開いたり閉じたりしている。閉じるたびに童の膝小僧に黒く青いビロードのように輝く雫がゆっくり落ちてピシャピシャと、それがなんだか甘酸っぱい香りなのだ。

その瞳は無邪気そうに・・・、だがよくよく奥を覗き込むとそこは深い宇宙の真空の淵を覗くように突然不気味に思えた。

私は「あっ」と小さく叫んで。ついでに頭を押入れの間仕切り棚に思いっきりぶつけてしまった。目の前で火花が散った。実際火花が散ったかどうかは判らないが、ほんとうに火花が見えたのは初めてだ。

天（てん）の五線譜

（空白）

さてさて、私の座敷童に会った話は以上である。

なんだ、つまらないって？その後その児童はどうなったのかって？

そのようにドタバタやっていると、例の婆さんが遣ってきて何度も謝りながら童を連れ帰って行った。そして私はこのおかしな出来事を反芻して寝たせいも、その夜彼のこんな夢を見た。

「おじちゃん、あそんでくれんのか？」

ふっと声をした方をみると、手を繋いだ先にその童の顔が見えて。さっきその童が見ていた瞳の映る世界に漂っていた。私の身体はいきなり水槽に投げ込まれたゲンゴロウのように危うクルクルと前転しそうになってしまった。

はあはあ云いながら・・・額に汗している私を見ると、その童は楽しそうに笑ってこう言った。

「おじちゃんあそこまで行こ。」

指差し示した先には、白や淡いピンクや淡いみどり色の大地が浮かんでいる。言ったそばから彼は勝手に泳いで行った。

私もこんなところで置いておかれては大変とばかり、その後を追ったがなかなか追いつかない。やっと着いてみるとあの童の姿が見当たらず、星明かりの中に地平の先まですすきの穂が音も無く揺れている。気がつくやうに遠くであの童の頭が背の高いススキの向こうに見え隠れしていい、どこかに果物の木があるのか甘酸っぱい匂いが漂っている。

”どうも、かくれんぼをしたいようだな。”

そう思い・・・

「もう、いいかい？ もう、いいかい？」

と叫ぶと・・・

向こうで、

「まーだだぞ、まーだだぞ。」

と答える。

それに答えてススキは、ザワザワ天に向かって手を振る。見上げると空は満点の銀河で埋め尽くされ、天の川の五線譜に微細な流れ星が落ちるたびにチロロン、チロロンと音階を奏でるのだ。

盛岡奇譚（その壱）（完）